The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	勤労中高年ASD者のオートエスノグラフィー
Author(s)	林, 桂生
Citation	大阪大学言語文化学. 2018, 27, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

勤労中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー*

林　桂生**

キーワード：自閉症スペクトラム、オートエスノグラフィー、表象

This paper shows some of the remarks of the middle and old-aged ASD（Autism Spectrum Disorders）workers attending the meetings of Handai（Osaka University）ASD Cafe. The Cafe, which follows the style of Science Cafe, is planned and presided over by me with the support of several professors at Osaka University United Graduate School of Child Development and Graduate School of Language and Culture. The purposes I try to achieve through the project are to promote mutual understanding among the participants either with or without ASD, and to make open to the public the predicaments of the middle and old-aged people with ASD, who manage to work without sufficient support at their workplace. In this paper, I employ an autoethnographic method to analyze and consider the participants' remarks picked up from some of the meetings of the Cafe.

Two of the many problems that ASD studies today have are that most of the studies tend to exclusively focus on children or younger people, and that the media such as TV programs, even when they cover middle-aged people, focus attention on only a few prominent persons with ASD, who, for example, confess having a very serious condition of hypersensibility so that they even have difficulty to live. Unlike those especially famous people, ordinary citizens with ASD, including me, don't have the means to ask for support for their comparatively milder condition of hypersensibility or seemingly less serious communication troubles.

I once wrote an ethnography of a participant of our Cafe with ASD, but throughout my research career I have not emphasized or taken advantage of having ASD myself, although our ASD cafes have been held as many as twenty times for the last three years. So I decided to write about how both the participants and I feel, when faced with communication problems with non-autistic people in everyday lives through autoethnography. I insist that it is both people with severe physical symptoms of ASD and

---

* An Autoethnographic Study of the Remarks of Middle and Old-Aged ASD Workers at an ASD Cafe（HAYASHI Keisei）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

people like us who have different viewpoints and unique ways of communicating due to ASD who need public or private support.

1 はじめに

自閉症スペクトラム障害または自閉スペクトラム症（ASD: Autism Spectrum Disorder、以下 ASD と記す）は 2013 年 5 月に公表された DSM-5（アメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引」第 5 版）で新たに定義された名称だが、従来の広汎性発達障害と特性が重複しており、旧診断名アスペルガー症候群・高機能自閉症・特定不能の広汎性発達障害の者がほぼ含まれる。診断基準の大きな柱は「社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害」と「限定された反復する様式の行動、興味、活動」[1] である。

アメリカの児童精神科医レオ・カナーの研究による自閉症児の「発見」は 1943 年、イギリスのヴィクター・ロッターによる 7 万 8 千人の子供を対象とする最初の疫学的研究が 1966 年、さらにカナーのいわゆる「自閉的孤立」を示す児童だけではなく、1944 年のオーストリアの小児科医ハンス・アスペルガーの論文に見られるような「知的には正常で、孤立的ではなくても社会性の欠陥と細かな儀式的行動のある子どもたち」（フリス 2009:120）すなわちアスペルガー症候群が、自閉症の娘を持つイギリスの精神科医ローナ・ウィングによって陽の目を見たのは 1981 年である（前掲 :28-34,119-120、備瀬 2011:48-51）。このように児童を対象とした比較的新しい発見であるという歴史的経緯から、自閉症は子供しかいないと長い間思われていた。自閉症の成人男性をダスティン・ホフマンが演じる映画『レインマン』の日本公開は 1989 年であったが、知的障害とサヴァン症候群を伴うキム・ピークをモデルとしており、知的障害のない我々のような広汎性発達障害者像とはかけ離れていた。

我が国における成人の ASD 者への理解についての時系列が伺える文献はいくつかあるが、たとえば広沢（2010）は次のように記している。

> 今から 20 年以上前のことである。（…）彼らはいつしか病棟では、「統合失調症（精神分裂病）といわれてきた人」、「躁うつ病といわれてきた人」、「人格障害といわれてきた人」となっており、筆者には彼らの入院理由も今後の対応もわからず、途方にくれる日々が続いた。（…）

[1] 以下、本稿で引用する診断基準の訳文は「自閉症スペクトラム（DSM-5 の診断基準）」http://esdiscovery.jp/griffin/psycho01/dsm5_09.html を参照している。（最終閲覧日 2017 年 11 月 17 日）

今でも忘れないのは、筆者がこれらの人たちの一部に対して、初めて発達障害という診断基準をもったときの、まるで目から鱗が落ちたような感覚である。それまで既存の診断では説明のつかなかった彼らの特徴が、次々と把握できたような気がした（…）。（広沢 2010: iii）

また、高橋（2011）は大学の学生センターでのカウンセリングに関して、「17 年前に学生の診断結果を通して『広汎性発達障害』（以下 PDD）や『アスペルガー障害』という概念を知って以来、この概念は筆者の学生理解に大きな手がかりを与えてくれた」（高橋 2011:148）と述べている。つまり、1980 年代、90 年代には精神科医やカウンセラーにも発達障害そのものが知られていなかったのである。その後、いわゆる大人の発達障害が書籍などを通じて知られるようになったとは言っても、未だその研究は教育関係者によるものをはじめとして児童が主に対象とされ[2]、支援機関や自助会などの組織も子供やその親を中心としたものが多い。本田（2013）は医療と発達障害者支援を兼ねた新しい施設である「山梨県立こころの発達総合支援センター」を開設するにあたって、「この種の施設にありがちな『障害』と『子ども』という言葉を名称に入れなかった」とわざわざ自著で断っている（本田 2013:242-243）。確かに、我が国の数少ない発達障害を主に扱う大学院やその附属センターなどは、少子化の昨今、子供よりも中高年の方が圧倒的に数が多いにもかかわらず、ほぼすべてに「小児」「子ども」の語が名称に含まれている。

以上の点から、知的障害を伴うカナー型自閉症しか知られていなかった 1950 ～ 70 年代に生まれ育ち、障害と認識されることもなく困難を抱えながら何とか生き抜いてきた現在 40 代、50 代以上の中高年 ASD 者、特に一般就労の者に対しては職場での支援も研究もほとんど進んでいないと言える。書物・TV 等のメディアで世間への啓発のために情報を発信することができる当事者が、わずか 10 代、20 代程度で診断を受けた若者や、40 代以上であっても重度の感覚過敏等の身体的不具合を有する一部の特定の者に限られていることも情報が偏る原因となっていると思われる。

本稿筆者が企画・主宰し、大阪大学大学院連合小児発達学研究科及び言語文化研究科の教員の協力の下で開催されている「阪大自閉症スペクトラム（ASD）カフェ」（以下、当カフェと記す）は、一般市民が専門家を交えて話し合うサイエンスカフェの形式を取

[2] たとえば CiNii Articles（http://ci.nii.ac.jp/）で「ASD 児」で検索してヒットする論文数は 84 件、「ASD 者」は 14 件、「成人 ASD」は 31 件、「中高年 ASD」は 0 件である。また「自閉症児」2917 件に対して「自閉症者」は 429 件であり、ASD に加えて ADHD や LD を含むため少し範囲が広くなるが、「発達障害」関連の語で検索した結果は「発達障害児」3334 件、「発達障害者」949 件、「成人発達障害」13 件、「大人の発達障害」66 件、「中高年発達障害」0 件、「高齢発達障害」2 件である（2017 年 11 月 3 日現在）。

り、ASD 当事者と非当事者双方の相互理解を深める場を提供するものである。その目的は、できるだけ多くの一般の人々に勤労中高年 ASD 者の苦境の実態と様々な特性を周知させ、支援・配慮へとつなげるために、プライバシーに十分配慮した上で当事者の語りを公表することでもある。本稿ではまずオートエスノグラフィーという手法について述べ、後半で当カフェの参加者の語りを取り上げて、職場における支援の不足の現状や問題点を明らかにする。

2 オートエスノグラフィーとは

オートエスノグラフィーは、「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」で、「内部の視点から文化について考察」する。ネイティヴ・エスノグラフィーや当事者研究と重なる部分があるとも指摘されている（藤田他編 2013:104）。

社会学者のエリスとボクナーも、研究者も中立的な傍観者ではなく生身の人間であり、データの一部となることを主張する（Bochner&Ellis 2016:57）。また、小説家のように語ることを推奨し（前掲 :60）、「物語の筋の道徳的・感情的・美的・知的側面にコミットしながら共同参加者になること」を読者に求めるのだが（エリス他 2006:143）、エリスの代表作がパートナーの闘病と死を扱っている（藤田他編 2013:107）ことからも、個人的、主観的な語りであることに重点が置かれているように思われる。

一方、Deborah E. Reed-Danahay（1997）はその編著書 *Auto/Ethnography : Rewriting the Self and the Social* で、カルチュラル・スタディーズにおいて発展してきた二つの主要な議論、誰が誰を表象するのかという問題、すなわち「『あるがままの』描写としての表象（レプレゼンテーション）ではなく、代替〔レプレゼンテーション〕としての表象（レプレゼンテーション）」（サイード 1993:58）の過ちの可能性と自己再帰性を強調しており（Reed-Danahay（ed.）1997:1）、書き手は二つの文化の境界を行き来して二重のアイデンティティを持ち（前掲 :3）、オートエスノグラフィーは社会的コンテクスト内に自己を置くセルフナラティブであると定義している（前掲 :9）。

我々 ASD という「障害」を有する者にとっても表象は重要な問題であるが、障害学の見地から、イギリスのフェミニストで自身も車椅子の利用者である Jenny Morris（1991）も、Brian Clark の戯曲 *Whose Life Is It Anyway?*（邦題『この生命（いのち）誰のもの』）など複数の作品を挙げて欧米における健常者側からの身体障害者に対する偏った表象を批判している（Morris 1991:92-107）。特に障害に関しては健常者が健常者の認知や感覚で障害を論じてしまう点が重大な誤謬の要因であり、別稿でも論じたが、ASD の場合は生半可な知識しかない心理職や施設職員の私見が 2016 年においても出版され

てしまうのが我が国の現状である。太田（2001）はマリノフスキーの偏った表象について「マリノフスキーがトロブリアンド島民について語りえたのは、トロブリアンド島民が異議申し立てを行わなかったからである」と指摘している（太田 2001:45）が、我々ASD 者は、少なくとも本稿筆者は人類学者ならぬ支援者あるいは特定の者のみの視点による偏った表象には異議申し立てを行う。

先にオートエスノグラフィーはネイティヴ・エスノグラフィーと重なる部分があると述べたが、これは「当該の文化のなかで生まれ育ったネイティヴ自身」が、「集団の内部者としての立場をふまえて、内側からその文化について分析や考察」を行う（藤田他編 2013:68）ものであり、これが ASD 者に適用できない理由は二つある。第一に、ASD 者は「当該の文化」の中ではなく、ASD 者とは異なり、通常の発達過程を経て成長する健常者あるいは定型発達者という多数派の文化の中で生まれ育っているという事情が挙げられ、「内側からその文化について」考察するだけでは足りず、ASD 者独自のものの見方と定型発達の文化の両方の比較衡量が必要である。統合失調症者の「浦河べてるの家」の研究で知られている当事者研究と異なるのも、ASD が幻覚・妄想などの自身の病的症状と折り合いをつけるために研究という手段を選ぶ意義を持つ疾病ではなく、定型発達者との齟齬が生活上の支障となる「社会性の障害」を重要な特性とするからである。

以上の理由で、本稿筆者は我々 ASD 者の苦境の表現にオートエスノグラフィーという手法を用いる。

3 勤労中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー

3.1 聴覚過敏とカクテルパーティー効果

社会性の障害で生活に支障を来す勤労中高年 ASD 者においても、限られた範囲ではあるが感覚過敏という障害特性を有することが多い。感覚過敏については、成人自閉症者本人による世界初の自伝、ドナ・ウィリアムズの『自閉症だったわたしへ』（1992（邦訳 1993））で既に詳細に述べられているが、DSM-5 において初めて診断基準として、「限定された反復する様式の行動、興味、活動」の一部という位置づけで「感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性、あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心」のように明記された[3]。

感覚過敏は当カフェでも参加者によって特に「聴覚過敏」に言及されることが多く、備瀬（2011）も発達障害の感覚の偏りについて「聴覚では、周りのざわめきなどがすご

[3] 注 1 参照。

く耳障(みみざわ)りな音に聞こえてくると言います。目の前の人の話も、周囲の雑音も同じ刺激となって、耳に飛び込んできます。（…）注意や選択性の偏りによる問題です。そんな雑音に囲まれて、目の前の人の話に集中しなくてはいけないので、すごくイライラしてくる」ことがある（備瀬 2011:136-137）と説明している。

このうち、「雑音に囲まれて、目の前の人の話に集中しなくてはいけない」場合に問題となるのが、カクテルパーティー効果である。浜渦（2005）は、「ケアの人間学」という分野の「ケア」する側の入門書において、「関心により濃淡の差のある世界」に住む「わたしたち」のごく当たり前の行動としてそれを挙げている。カクテル・パーティーのような BGM や大勢の人のおしゃべりや食器の音などの喧騒の中で友人と二人で談笑している状況でも、「友人の話していることをちゃんと聞き取り、友人との会話はさしつかえなく行われる。つまり、『聞く』ことにも、関心により濃淡の差があり、私たちは、耳に飛び込んでくるすべての音を『聞いている』わけではない」という（浜渦 2005:16）。同書ではこの後、「見る」ことにおいても「濃淡の差」があるという記述が続き、「『ケアする存在』としての人間が、『ケア』を向けるのは何よりも『人』であり、他者なのである」（前掲 :17）というケアに関する論旨が展開されるが、ASD 者はその対極の位置にある。重度の自閉症児は他者に関心を示さず、ASD には程度の差はあれ、聞こえるもの、見えるものを選別できないという特性がある。

以下、聴覚過敏とカクテルパーティー効果に関する当カフェの参加者の発言を示す[4]。

> C さん【40 代女性・当事者】: 私、今、A 型の作業所[5]で働いてるんですけど、ストレスが昂じると聴覚過敏が発生するのがありまして、A 型の作業所というのは大体ビルの一室で 20 数名が詰め込まれて作業するんで、あっちこっちでいろんな作業をしていて、いろんな怒号とか飛び交うんですね。（…）それがすごい気に障って、（…）仕事に集中できなくて困ってるっていう、まあ、今抱えてる悩みの一つですね。すごくしんどいです。（2015.9.19 第 7 回）

その後、多少は状況が好転することもあったのだが、職場の騒音の問題自体は実に 1 年半ほどたっても改善されていない。

---

[4] 当カフェはおよそ 2 か月に 1 回、大阪大学言語文化研究科で開催されており、参加者は各回 10-20 名ほどである。抜粋は筆者を含む当カフェ参加者の発言で、各人の年代・性別等は呼称の後の【　】に記載する。データ採録日時及び当該カフェ開催回は末尾に記す。また、発言のうち（…）で省略を明示した部分以外も間投詞や反復表現等を多少削除・修正している。

[5] 就労継続支援 A 型事業所。当カフェの参加者でここを利用しているのは「(3) 企業等を離職した者等就労経験のある者で、現に雇用関係がない者」にあたる（厚生労働省 HP、http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/naiyou.html　最終閲覧日 2017 年 11 月 17 日）。

C さん：うーんと前の時に作業所ですごくうるさいという話をさせてもらったかと思うんですが、（…）ヒューマンノイズと言ったらいいのでしょうか、人がいることによって起こるノイズっていうのがすごくって、（…）「お疲れさまー」って帰って、「はあ、しんど」ってなるんですよね。（…）たったの 4 時間しか作業所で働いていないのに、なんでこうなるんだろうって思ってたんですけども、おそらく聴覚過敏のせいやろな、と。まあ、治らないということなんでしょうがないんですが（…）。（2017.4.23 第 17 回）

この回ではその後、同じように職場での他者の大声で悩んでいる 30 代の女性当事者の発言が続き、他の参加者に「発達障害の人はやっぱり聴覚過敏の人が多いんでしょうか」と問われて、筆者が次のように発言した。当事者・非当事者双方の成人が集まる他の発達障害関連のカフェにゲストスピーカーとして招かれた時の話である。自分のトークの後は複数のグループに分かれて話し合いがあった。30 代以下の若者を含む各グループのメンバーが同時に大声で話すため、筆者にとってはどのグループの声も同じように聞こえて騒然とした状態であり、目の前の参加者の言葉が聞き取れなかった。

筆者【50 代 X ジェンダー・当事者】：聴覚過敏の人は多いってわけでもなさそうですよね。よその集まりでちょっと、うるさくて、うわあとか思いながら帰って来たことがあったんで。発達障害の方ばっかりですけど。人によりますね。全然、もうわーっとみんなで楽しくグループに分かれて、（…）私にしてみたらものすごい騒音なんですけど楽しくちゃんと話し合いしてて、きちんと結論も出てて、発達障害の方ばっかりですよ、それびっくりしてカルチャーショック、発達障害同士でカルチャーショック受けて、みんなこんなうるさくても平気なんや思って（…）。（2017.4.23 第 17 回）

当事者であるはずの主催者に苦情を伝えたが、ASD の障害特性は個々によって様々であるためか、「聴覚過敏の方の感覚だけを優先することが良いことだとは思いません」とのことだった。以下は同様の話題が出た時の発言である。

B さん【50 代男性・当事者】：指示出す人の声より横で喋っている人の声とか、そういうのが耳について、（…）「ちょっと黙って」って言える人ならいいんですけど、自分より年配の方とか役職が上の方だったらそれは言えない。でも雑談っぽいのはされてると、そっちの意味のあること、僕、意味のあることはもう耳に入るんですけど、（…）肝心のことが聞き取りにくいっていうのが職場で困ってることなんですけど。

（2015.9.19 第 7 回）

2016 年 3 月の第 10 回においても、B さんとは別の 50 代男性当事者から、「向かい合って話をしてたりとかでも、横からなんか雑音なりノイズが聞こえてくると、もうそっちの方に注意が行ってしまって相手の話を全然聞いていないので、受け答えがもう全然ちぐはぐに」なる、という発言があった。病院でも「診察室でパーティション 1 枚挟んで、向こう側に薬剤師の方とか受付の方がいらっしゃって、そこでいろんな話が、受付でトラブルとかが起こっていると、（…）先生が一生懸命自分に質問とかされているのに全然答えられ」ないという。

前述の発達障害カフェだけではなく、他県の自閉症サイエンスカフェでも原則としてグループに分かれる上に、当事者の発言中であっても同じ室内で待機しているスタッフが私語に興じるという、聴覚過敏やカクテルパーティー効果の困難への配慮が一切なされていない状況であった。要するに、ASD と言っても聴覚過敏を持たない当事者が主宰する、あるいは参加者がそのような者ばかりであるカフェ、当事者会、シンポジウムなどでは、通常の定型発達者のワークショップなどと同じ形式が取られているのである。就労支援事業所の騒音もそうだが、ASD 関連の集まりですらこのように障害特性を無視している現状を改善するには、自治体や関連団体に強く働きかけ、今一度、地道に聴覚過敏についての啓発を進めることが必要である。

3. 2「異文化」と表象される ASD 者

だが筆者らの身体機能に関わる障害特性の程度は、非常に重篤な身体機能不全の症状を有する ASD 者に比べると「軽い」方であり、日常生活が破綻するほどではない。就労の不可能な他の ASD 者はどのような状況であろうか。

ASD を「異文化」とする見方は、たとえば杉山（2007）が著書に「自閉症という文化」という章を設けて示しているが、その例はアスペルガー症候群の翻訳家ニキ・リンコとドナ・ウィリアムズであり、その章の一項の「異文化としての自閉症」で特に取り上げられているのは、1986 年に世界初の自閉症者の視点の共著書を世に出したテンプル・グランディンである（杉山 2007:69-89）。

ニキは自分の身体でさえ、見えない部分に関しては「自分には背中がない」から「パーカのフードやポケットがどこかに引っかかると、なんで動けないか理解できなくて、半日くらいじっとしていたり」、炬燵に入れば自分の「脚がなくなってこわい」と感じたり、傘を持てば「どこからどこまでが傘で、どこからどこまでが腕なのかわかんなくなって、運動機能が全般的に低下する」（ニキ他 :42-46）という。「異文化」の人として表象され

るASD者は、いずれも社会性・コミュニケーション障害以外に激烈な身体の機能不全や感覚過敏を有し、ある意味、あまりにも尋常ではないから有名になったのだと言ってもよい。ニキ自身、「自閉じゃない人にも自閉的要素はありますが、やはり私たちはそれとは違うと思います。一人の人の中にたくさん集中したり、濃縮されたりすると自閉になるんだという気がします。ある線を越えて濃縮されると、量的変化が質的変化に転ずるところがあるような気がしています」と述べており、編集者もニキや藤家をやはり「『自閉』という異文化の中に暮している人だ」（前掲 :128）と評している。つまり、「異文化」として論じられるのは、健常者と顕著に異なる点が多い、重度の身体機能不全をも伴う一部の重篤なASD者なのである。

綾屋紗月と並んでASD者として何度もメディアに登場している片岡聡は「私たちの感覚過敏・鈍麻は『気になる』あるいは『気にならない』というレベルで表現できるものではない。健常者には全く気にならない電話のベルの音で完全な思考停止に陥ったり、虫垂炎の痛みを全く感じず危険な状態になるまで受診できなかったりと生活に多大な支障を来すレベルのものである」（片岡他 2014:18）と記している。共著者でASDの菊地啓子についても次のような描写がある。

「学校で休み時間になった途端に周囲の音に耐えられなくなり、悲鳴を上げながら教室を出る」というようなことが頻繁にあった。（…）障害と認識しないまま就職した結果、「仕事中に別の部署で硬貨を数える音でステンレス製の机に頭を何度も打ちつける」「我慢を続けて意識を失う」など、自助努力による環境調整の限界を超え、慣れたはずの自宅でも水洗トイレの音等によるパニックが悪化した。（前掲 :20）

自閉症スペクトラムの範疇に属する者が10人に1人（本田 2013:111-114）と言われる中で、このような「手厚い保護が必要な人たち」は「ASDの人の中には百人あるいは千人に1人程度」であると片岡自身も述べ、「このような困難度の高い人たちをどのように支援していくかという視点がおろそかになってはならない。そして、ASDの人たちの重症度を評価するうえで知的障害の併存の他に、感覚の問題をはじめとする身体的困難の評価が考慮されるべきである」（片岡他 2014:19-20）と主張している。

一方、筆者をはじめとする勤労中高年ASD者が最も困難とするのは、たとえばカクテルパーティー効果が「他者」の話を聞き取らねばならないという状況があって初めて問題となるように、身体的なものというよりコミュニケーション問題である。ASDが見えない障害と言われる所以であるが、着眼点や理解の仕方の違いによるコミュニケーション上の失敗により、職場に居づらくなるなどして離転職を繰り返すケースも多い。

重症者の中には講演等の啓発活動や ASD 者対象の有償のカウンセリング業務・ワークショップ開催等を生活の糧の一助にするような者もいるが、公的支援も受けられないレベルの一見「普通」の中高年 ASD 者には、自力で就労する以外に生活の途は通常ない。このような困難度の低い、だが転職を何度も経験するという生活上の支障が実際にある ASD 者の支援もおろそかになってはならないし、「知的障害の併存」や「身体的困難の評価」と同等に社会的困難の評価も考慮されるべきであるとも言えるのである。

3.3 異文化でも定型文化でもない勤労中高年 ASD 者の視点

以下は、勤労中高年 ASD 者の周囲の人間との意思疎通の食い違いに関する当カフェの参加者の発言の例である。周囲の人間が定型発達の基準と思い込みで対処している点が伺われる。

B さん【50 代男性・当事者】：（一般的に）職場の配慮ということでしていただきたいというのがいろいろあるんですけど、一言で言えば、そこと違うねん、っていうのがありまして、言ってること（…）が理解してもらえないのがなかなか難しくて、（…）。特に、善意のアドバイスで、こうしたら改善できるから困ったことあったら言ってねって言われて、言うと、自分の困ってるところと違う意味でとらえられて、みなまで言わんでも俺はわかってるから俺の言うこと聞いといたらええねん、とか、私の言うこと聞いといたらええねん、ってアドバイスしていただけるんですけど、自分の困ってることとポイントが違う（…）。（2015 年 3 月第 4 回）

メディアに取り上げられるほどではなくても、ここには明らかに多数派とは異なる視点がある。下記の発言のような些細に見える着眼点の違い、考えの深さの違いに着目したい。適当に暗黙の了解で済ませているように思われる定型発達者の物事への処し方や考え方が本当に正しいのだろうか。

B さん：たとえば上役の指示がわからなくて質問します。ところが僕が頓珍漢な質問してるって上役も取るし周りも取る。実際は、困るであろうことを予測して質問してるわけなんですけども。「まあ後で言うたるから」言うてて（…）けど、実際に行動を起こした時にそこのところで障害が出て来る、と。ということは最初に詰めといたらよかったのにな、っていうのが多々あります。ところが、それはまあお互いにわかったつもりになってて、後で「だから言ったじゃないですか」って言ったら「なんだその言い方は」ってまた怒られるということで、そのボタンのかけ違いがしょっちゅう

なんですね。（2015 年 5 月第 5 回）

B さん：健常者同士の方々の会話聞いてても、あ、ここでこうもっと詰めてやっとけば勘違いないのにな、っていうことで、健常者にもそういう作業は必要やとは本来は思います。「ああ、あれね」って言うて、「あれね」って言うてたその「あれ」が、思い浮かべてたのが実はちごてたというのは多々あると思います。（2015 年 5 月第 5 回）

富山大学の支援チームは、発達障害学生が生きやすい大学はすべての人にとって生きやすい、と宣言する。第一に、発達障害学生は独特の認知の仕方をしており、発達障害学生同士でもそのパターンはそれぞれ異なっている。そのような「多様なものの見方が存在することを認めあうことによって、各自がそれぞれのユニークさをより生かすことが可能になる。このような大学環境は、特定の学生だけではなく、すべての大学構成員にとって、より生きやすい場となる」（斎藤他 2010:33-34）からである。第二に、「暗黙のルール」からはずれると非難されたり排除されたりする世界は、発達障害学生だけでなく他の構成員にとっても生きにくいはずである。「テクストやルールによって明示化できることはきちんと明示化したうえで、そのなかでよりよい交流を目指していくような文化」は、やはり発達障害学生以外の人々にとっても生きやすいのではないか。このような「場」を提供することは大学の責務である、と考えるのである（前掲 :34-35）。

それに対して、官民問わず一般の職場では思い違いや勘違いを防ぐこと、相手の話を聞くことがなぜできないのだろうか。B さんが述べたような、「『ああ、あれね』って（…）言うてたその『あれ』」が互いに違うものを指していた、という固定観念による行き違いなどはどこでも見られるものである。それを事前にわかっていながら、指摘しても理解されずにただ見ていなければならない知能の高い ASD 者への対応をどのようにすべきなのか。理解されないことの積み重ねで疲弊していく ASD 当事者が存在するのは事実であり、そこには定型発達者側が気をつければすむ程度の「些細な」ことも含まれ得るのである。

4 おわりに

繰り返すが、働けないほどの身体の不具合がなく、定型発達に合わせて意思の疎通もできる市井の ASD 者に関する啓発はほとんどない。雑音の苦手さや定型発達者とのほんの少しのコミュニケーション上の行き違いはいちいち報道されない。特性がわかりやすい重篤な ASD 者にのみ目を向けるメディアの「表象」もまた偏っているのである。これは次の状況と類似している。「人類学者はマヤの人々のことばに耳を傾けてこなかっ

た（…）。この指摘を受けとめれば、マヤに自らを『語らせる』という代替案がすぐに浮上する。しかし、（…）語りを聞くに値するものとして位置づける力は、つねに研究者が留保している」（太田 2001:195-196）。

これらの点の改善、すなわち働く ASD 当事者の周囲の人間の理解の向上が強く望まれるとともに、支援職など本を出版できる立場の一部の者が昔の人類学者のような手前勝手な「表象」をすること、一般の人々も研究者ならぬメディアが演出する重篤者の「表象」のみによって ASD について理解した気になることなどは避けるべきである。重篤者とは別の「勤労中高年 ASD 者」というカテゴリーでの啓発活動の推進が、今後の課題である。

〈参考文献〉

キャロリン・エリス、アーサー・ボクナー「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」N.K. デンジン、Y.S. リンカン編　平山満義監訳　大谷尚他編訳『質的研究ハンドブック 3 巻　質的研究資料の収集と解釈』北大路書房、2006、pp.129-164。

太田好信『民族誌的近代への介入　文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院、2001。

片岡聡、菊地啓子「当事者の見方から―DSM-5 の ASD 診断基準は自閉症理解への架け橋となるか？」『心理学ワールド』67 号、日本心理学会、2014、pp.17-20。

エドワード・W・サイード著　今沢紀子訳　板垣雄三、杉田英明監修『オリエンタリズム　上』平凡社、1993。

斎藤清二、西村優紀美、吉永崇史『発達障害大学生支援への挑戦　ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント』金剛出版、2010。

杉山登志郎『発達障害の子どもたち』講談社、2007。

高橋道子「自閉症スペクトラムの学生支援のあり方をめぐって―学生相談の現状と課題―」『精神療法』第 37 巻第 2 号、金剛出版、2011、pp.8-13。

ニキ・リンコ、藤家寛子『自閉っ子、こういう風にできてます！』花風社、2004。

浜渦辰二「ケアの人間学」浜渦辰二編『〈ケアの人間学〉入門』知泉書館、2005、pp.11-29。

備瀬哲弘『発達障害でつまずく人、うまくいく人』ワニブックス、2011。

広沢正孝『成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群　社会に生きる彼らの精神行動特性』医学書院、2010。

藤田結子、北村文編『現代エスノグラフィー　新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社、2013。

ウタ・フリス著　冨田真紀、清水康夫、鈴木玲子訳『新訂　自閉症の謎を解き明かす』東京書籍、2009。

本田秀夫『自閉症スペクトラム　10 人に 1 人が抱える「生きづらさ」の正体』SB 新書、2013。

Bochner, Arthur P. & Ellis, Carolyn.（2016）. *Evocative Autoethnography : Writing Lives and Telling Stories.* Routledge.

Morris, Jenny.（1991）. *Pride Against Prejudice*. The Women's Press.

Reed-Danahay, Deborah E.（1997）. Introduction. In D.E.Reed-Danahay,（Ed.）*Auto / Ethnography : Rewriting the Self and the Social.* Oxford:BERG, pp.1-17.